

行動日誌

海軍中尉 上山春平

昭和三十年五月二十八日

○九〇〇 光出港 快晴波ナシ 某官 司令官以下ノ心カクナル
囑望 激勵ノ辭 基地隊 擧ガシテ 壯行 皇國萬歳ノ
侍 侍ヒレヒレト 双肩ヲ 拂リ 来ルヲ 御見ナ 懐キ 基地ヲ 後
ニ 去リ 轉隊 本原隊 小敵 水上 勢力ノ 擊 斃シ 且 差シテ 太平
洋上 一路 南進 セルニ

一 号艇 和田少尉 二 号艇 石橋一飛曹 三 号艇 小官 四 号艇
小林一飛曹 五 号艇 久保一飛曹

全基 必中 天祐 神助ヲ 確信 某官 二 神意ヲ 思ハ
一九一〇 日 没ヲ 期シ 塔 東 員 次ノ 整備 員 乘艇 同内ニテ
各艇 整備 員 二 自爆 装置ノ 電路 結線ヲ 説明セタル後

海軍

通話 訓練 觀測 訓練 順行

二〇三。豐後 水道 東口 出 擊

二二四。一三五 度ニ 變針 海上 穩カキ 月 明昭々

足摺 岬 正横 艦ノ 余 故國ヲ 離レシトス。塔 東 員 士 氣 極

旺盛 情報ニ 依リ 機動 部隊ノ 會 敵 公算 大ナリ

仁科 少佐ノ 進訓ニ 則リ 應急 上 處 置道ヲ 説明 行ハ 尚

訓練 果リテ 殊ニ 注意スル 事項ヲ 注意ス

一 秒時計ノ 定期 捲回 毎日 〇七〇〇トス

二 突入 時ノ 調深 銘記 A. B. 八六 C. 八五 D. 八四 d. 八三

三 爆水 装置ノ 安全 装置 解脱

四 自爆 装置ノ 安全 解脱

五 自爆 装置ノ 安全 解脱

六 自爆 装置ノ 安全 解脱

125
1200

昭和二〇年五月二十九日

〇五四。教練回天戰用意

教練小出美雄少佐用敵ヲ重ネ如何ナル事態ニ臨ンテモ後レ

ヲ取ラザルハ底ニカシキヲ西キアリ一回一回ノ教練ヲ日取后ト

思ヒ以テ全艦ヲ打込ニシテヤルコト何時會敵ストモ悠々

迅速之ヲ洋上ニ野射碎スルハ心構ハト練度トヲ併期ス

一九〇。浮上ハ上甲板整備 四号艇ハ瓦斯用溜水中ニ燃料

ノ混入ヲ認メ補油ノ他異状ナシ 波浪三乃至四ナルモ

上甲板整備亮分可能 明ルサモ下度ヨシ 日没一九〇八

整備完了后塔乗員乗艇ニ通話訓練 觀測訓練順行

訓練終了后下部ハツケニ交通同ハツケ閉鎖 以后浮上中

ハ急速潜航ノ際又ハ波浪高キ場合ノ危險ニ備ヘ常中ニ

西ノハツケ閉鎖 潜航中ハ會敵即應ノタメ閉キタル儘ヲ

海軍

ト定セリ 整備ノ原則トシテ潜入時同内整備 浮上直后ノ

上甲板整備ノ一回一回ハ訓練ハ之ニ引續キ行フモノトス

昭和二〇年五月三〇日

一 深度器整正會

機會アルニテ深度器整正會ヲ行ヒ各艇塔乗員之ヲ銘記

スルヲ要ス 浅吃水ノ目標ヲ艦聲セントスル際誤差ヲプレス

ル時ハ艦底通過トナリマイナシノ時ハ回天ノ運動不良 不要

ナル被発見效果ヲ伴フ恐レアルハナリ

二 戰鬥回天戰

本艦ノ電話号令詞中「交通筒注水」ノ前ニ「戰鬥回天戰」ノ

語ヲ入レテタルハ艦長ノ名断ナル事 無用ノ妙用アリ

一九〇。浮上其ハ一度ニ要針 上甲板整備 各艇少量

燃料減少補油 観測通話訓練順行 昨日ニ比シ
波浪少キニテ 整備訓練共ニ極メテ容易

左ノ項繰返シ隊員ニ注意

訓練ヲ全カキテ持テタルヲ常ニ敵ヲ削ニセルヲ持ニテ
真劍ニ行ハ通話訓練ヲ汗バム様ナ人コソ 実戦ニ臨ニテ
信心ノ固クアリ得ルハガ

ニ深度計誤差ハ毎回ノ一トシテ記録ノコト

三秒時計ノ整合捲回ヲ毎日定時ニ欠カサズ行フコト

四、各目標ニ対スルニ測深絶対録記ノコト

精密聴音 常ニ全周感ナシ 艦ハ今黒潮ヲ斜ニ截ツニ
洋心ヲ目差ス

海軍

昭和二〇年五月三十一日

五、五潜航針路南ニ通話艦艇訓練順行 筒内整備

四号艇調圧用ロッド貫通部ヨリ約一立浸水 尚ニ変流器

起動ノ際「アース」発見 艦内電路員ニヨリ直ニ修理

一九〇五海上 海上前「アース」立見ラシキ音源捕捉セルモ目標

ヲ視認シ得ズ 帰途ニアル 伊三六七潜ナラムト推定

上甲板整正備各艇異状ナシ 雨波ナク 整備容易

昭和二〇年六月一日

昨日ヨリ是言 勝雨模様

〇四四五潜入 訓練整備順行 四号艇ノ浸水依然止マラス

筒内整備甚シ 塗料ヲ万偏ナク塗エル必西セアリ

今四國南才約三〇。理愈々會敵圈内ニ入ル 機動部隊